<1994>

◎中井俊作　帰農への道（月刊 緑健文化）

毎月1回15日発行　昭和39年2月20日第3種郵便物認可

月刊 緑健文化

COOPERATION & ECOLOGY　1部300円 年間3,000円

社団法人 日本協同体協会
代表 奥村久雄
〒321-12栃木県今市市栄町2083
TEL 0288-26-1219・2038
振替 00150-2-24403

日本協同体協会
緑健文化研究所(草刈善造)
〒085-11北海道阿寒郡鶴居村上幌呂
TEL 0154-65-2353
振替 02700-1-42245

中井俊作／帰農への道

編集室・資料ファイル
上野允士

「我が帰農の記」

天草の中井俊作さんに資料をお願いしていたところ、柿やサツマイモなどといっしょに、七点ほどのコピー資料が送られてきた。

すべて中井さん自身の文章で、「土と健康」（日本有機農業研究会機関誌）、「書斎の窓」（有斐閣PR誌）、「稜線」（早稲田大学高等学院ワンダーフォーゲル部創部三十周年記念誌）などに発表されたものである。

そのうちもっとも長文の原稿は、今から十年ほど前に書かれた「我が帰農の記」である。これは「リサイクルジャーナル」という雑誌に長期連載された。全体で、一一〇ページほどの分量がある。

中井俊作さんの生い立ち、思想形成の過程、実験的生活、天草の日常などが記されている。

送っていただいた「我が帰農の記」は、掲載誌をコピーに取り、それをまとめて製本したものである。残念なことに中井さんの手元にもこれ一部しかなく、私が読み終えたら返却することを約束している。

「我が帰農の記」を読みながら、「文は人なり」ということわざが何度も私の頭をよぎった。中井さんのこの記録は、そういうことわざを連想させるような特質をそなえている。

本文から私が受けたもっとも強い印象、それは、中井さんの自己に対する並外れた正直さ、誠実さである。

今回はこれらの原稿にもとづき、中井俊作さんの実験的生活の一端と、「帰農」にいたるまでの足跡をまとめてみたい。

なお、中井さんに関する本紙記事としては、「新農民像・中井俊作さん」（草刈善造／二七七号＝九〇年一月号）がある。

実験的生活

はじめに、ひとつの数字を紹介してみたい。

日額　一六〇円
月額　五〇〇〇円
年額　六〇〇〇〇円

少し古い数字ではあるが、これは、今から八年ほど前の一九八六年当時における中井家一家三人の食費である。

その後の物価上昇、そして家族も四人となったことなどから、今日ではもう少し増額していることとは思うが、この信じがたいような数字が、中井さんの目指した「実験的生活」の姿を端的に示している。

以下、中井さんの文章から、その「実験的生活」の思想および実践の一端を紹介してみよう。

▼食費ですが、我が家では原則として買い物は三点に絞っています。塩と醤油と油です。下の二つはいずれ自給するつもりです。この三点だけなら年に2万円で間に合います。海草は浜に拾いにいくか物々交換。ラジオ・TVは情報源として活用しますが、冷蔵庫のプラグは抜きました。燃料は炭と薪が主でプロパンは従。要するに、情報通信、交通運輸の便宜を除けば、一昔前に近い生活としたのです。私にとっては、《必要不可欠》の実験でした。

▼お金を使わぬように心掛けよう。自分の《生活》に必要な手立ては可能な限り自分の手に取り戻そう。自分の作れぬものは、徹底的に大事に使

おう。他人の労働の成果を大切にできない消費生活は生態系の破壊を促進するばかりです。

▼ああ、一体誰が《農》を職業などと位置付けてしまったのだろう。どうして人はその不自然さを許してしまったのだろう。なぜ《自分の食物を自分で作る》という《基本的人権》を一方で投げ出し、他方では奪って平気でいられるのだろう。お金はかつて人々を身分から解放したかもしれない。しかしお金に替えがたい《生活》までをお金に換えてしまうことの不自然さに気づかないのは何故でしょうか。

▼《土ばなれ》した文明がかつて地上で長続きしたためしがありません。いくら建前が立派な世の中を作っても、土ばなれした人々の勝手な振る舞いが幅をきかせるようになったら、その社会は危険です。その危険性を認知して、《足ることを知る》社会へ歩みだしたいものです。戦争や破局に至ることを考えれば、少々の自制は何のこともないでしょう。

▼自分の食べるものくらいは自分で作る。これは長い間の私の願いでした。日本CI協会を訪ねた私はそこで決定的な言葉を耳にします。「日本では水と塩と米さえあれば餓死しないよ」です。この言葉は私の頭の中に火花を散らしました。これならなんとかなる。米だけなら石にかじりついても作ってやる！

最小の費用での生活の実現を可能にしたのは、この玄米菜食の知恵です。冷蔵庫を不要にしたのもこの知恵のおかげです。私にとって最も意味があったのは、この知恵に触れたとき、食物自給への自信がわき、決意が固まったことです。

▼玄米を水洗いして水を切る。何かの拍子に生ゴミだめに米粒がこぼれる。そんな時はゴミをひっくりかえして一粒残らずつまみ取りました。むろん、ばかばかしいという気持ちが湧きました。しかし本気でばかばかしいと思うなら、二度とこんなヘマをするな、と意地でやりました。私にとっての自炊とはいわばこのようなやりとりの連続でした。

▼台所仕事などに煩わされていたら、大の男一匹、人間らしい思索生活など送れない、そんな本末転倒した自分の生意気さが鏡に映ったのです。冷たい水にひび割れた手先をシビれさせて下仕事をしているとき、腹の底から熱く沸き上がってくる声は、「コトの重さのわからぬ生意気な阿呆者が偉そうなコトを言うならカスミでも食いながら口を叩け、貴様なんぞの食事の支度は真平御免だ！」

少年時代

中井俊作さんは、昭和二十一年、東京に生まれた。

小学校一年生の年、病気のため、半年間、休学。以来、小学校時代は虚弱児童であった。

「運動会の徒競走ではシンガリを受け持ち、鉄棒ではブラ下がるだけ、体育の時間は恐怖と屈辱の時間」と記している。

中学校に入ると、器械体操部に入部。これは「その肉体的コンプレックスを克服するため」の選択であり、挑戦、修行、克服の道をくりかえしていく、その後の中井さんの人生の原型がここに見られる。

この少年時代に、すでに俊作少年の中には、「都会の人間と田舎の人間、同じ日本人でありながらまるで人種が異なるかのようなその違和感」の自覚が形成されていた。

その意識もまた、コンプレックスを土台としている。避暑先の信州で出会う田舎の子供たちに抱いた恐怖心。また中学生時代には、一人で中仙道を歩いていて、下校途中の少年たちの声を耳にしただけで、思わず草むらに身をひそめたこともあるという。彼らのたくましさが怖かったのである。

「この感覚が長じては農民・漁民への畏敬となり、百姓志向の土台になっていることは間違いありません」

学生時代

高校入学と同時に、中井さんの修行は、まず「自然」へと向けられる。

彼は登山とスキーに熱中する。

登山の目的は、「自然の中で生き抜く技量を身につけるため」であり、スキーの目的は、「雪国で困らぬように」するためであった。

冒頭、資料紹介の中で記した早稲田大学高等学院のワンダーフォーゲル部は、中井さんが属したクラブであるが、「クラブ活動の中にあって、苦行的な雰囲気を漂わせがちの私はそれなりに敬遠されていました」と記している。

それに引き続く修行は、農山漁村への旅、である。

車を使っての長距離旅行で、北海道をのぞく全国を回る。日本列島を知ること、見ることに主眼をおいた。

大学での中井さんは、理工学部・工業経営学科に籍をおく。

「一年生の終わりに発生した大学紛争では内側からバリケードを築いた一人」であり、学業の方面では、「学業以前の問題に引っ掛かって、落ちこぼれ寸前の学生」であった。

「分かっていたことは、このままでは自分は人間失格になる、という不安の確かさと、社会の不条理を抱え込んだまま、まばく進する工業化社会の将来に対する危機感の存在でした」

そこから、自分がたどるべき二つの道が現れてくる。

人間失格への不安からは、百姓志向が、工業文明社会への危機感からは、政治家への道である。

大手製鉄会社へ入社

大学を卒業した中井さんは、大手製鉄会社に入社する。大伯父が初代社長、父親が子会社の社長をしていた関係で、彼の入社は約束されて

いたのである。

中井さんは、いったんはこの就職を辞退している。

それは、大企業に就職するために努力を重ねてきた学生に対して、自分の存在は「不条理」であるからであり、また企業の人となることは、自分の歩むべき道からはずれることをはっきりと自覚していたからである。

彼はそのことを人事担当者に話し、会社に迷惑をかけたくはない、と伝える。

けれども彼は、その場に同席していた父のことばに折れる。

「実社会に出ておらずに、偉そうなことを言うな。入れてくださるというのだから、仕事をしてみてから考えろ」

こうして中井さんは、形だけの入社試験を受ける。答案はほとんど白紙だったという。

中井さんが配属されたのは、千葉県にある最新鋭製鉄所の管理部門。構内バスで一周五十分も要するような巨大な工場群、日本の科学技術力を総結集したかのような設備などに圧倒されながら、「三年と一カ月半」におよぶ製鉄所勤務がはじまる。

「気分は実にみじめなものでした」と記している。

製鉄所にて

管理部門に身をおいた中井さんが担当した仕事は、生産現場の能率測定、外注管理、安全管理などであった。

中井さんの目は、下請け企業から来ている肉体労働者に向けられる。

「父ほどの年齢の人が、ベルトコンベアの継ぎ目から落ちる鉱石をスコップで黙々とすくい上げている。舞い上がる粉塵が顔にこびりつき、目だけが生々しい。

作業員とは、どうやら出稼ぎ農民、あるいは陸に上がった元漁民の中高年齢者。

現場で目にする劣悪な条件下、農・漁村を離れてやむなく単純肉体作業に出てくる人々。彼らはたとえ小規模であったにせよ、食糧の生産者であったのだ」

中井さんの文章から具体的なことは分からないが、彼はこうした現場労働者の作業環境改善のために行動している。「下請け企業に出向き、作業改善について担当の係長とやりとり」という一文があったり、「見るに見かねて個人的なおせっかいの色合いも強いわけで、会社にとっては経費を増すばかりです」という一文があったりする。

やがて、「職場で目にすることをいちいち社会の構造の問題にまで拡大して考えがち」な中井さんの仕事の能率は落ちていく。

彼は仕事中、よく居眠りをするようになる。「もちろん、故意にではない」と断ってはいるが、「いつのまにか瞼が落ちている」のである。

彼の居眠りは人事部で問題にされた、とある。

次に引用する一文は、そんな中井さんの居眠りの中での出来事である。

そんなある日、頭をたたかれて振り向くと、定規を手にした娘が立っている。

彼女は口を開いた。

「ここは眠るところではありません」

定規で中井さんの頭をたたいたこの女性が、それから十年ほどののち、彼の妻となる人である。

父の郷里天草へ／衆議院総選挙への出馬、そして落選

中井さんが製鉄所勤務に限界を感じ、退職を決意しつつあったとき、その様子を見かねた父親が助け舟を出す。

「お前がその気なら、私のかわりに郷里に戻って、政治の道に進んでみろ」

こうして中井さんは、昭和四十七年、二十六才の若さで、衆議院総選挙に出馬することになる。

選挙資金五千万円以上。父親を中心に話は進められ、後援会組織が形成されていく。

ここには、訳も分からないままに、「それまでとは質も量も桁外れに異なる」大きなうねりの中に巻き込まれていく「危機感ばかりが先行した未熟者」の青年の姿がある。

選挙区は熊本の南半分、農山漁村の地域であった。

彼の理想的、ないしは観念的言動は、地元の人々の次のようなことばにむかえられる。

「お前のようにぜいたくをしてきた人間だから言えることだ」、「都会育ちの坊ちゃんに何が分かるか」、「ビフテキを食べたことがなければ、一度は食べてみたいと思う」

これらのことばは、その後も長く、中井さんにとっては「越えられぬ課題」となったと記されている。「私の危機感は全くの一人相撲に終わった」のである。

なお、中井さんは、その後も数回、地方自治体の選挙に出馬している。

ここでは、二十九才の時、本渡市（天草の中核都市）市長選挙に出たときの様子を紹介しておきたい。以下は「自然に、自分に嘘はつけない」という文章から引用。

せめて天草くらい、〝生き残れる島〟にしたい。これが僕の想いであった。初めは辻説法、途中からジープにスピーカーを乗せてハンドルを握った。ポスターは自分で貼り、自分ではがした。開票の結果は現職市長が大差で五選され、僕は社共・共闘候補をわずかに上回って次点だった。選挙費用は二〇万円。先の選挙の反省を踏まえ、《自分の姿勢》を明らかにしたこの立候補は、その後の僕の歩み方を決定づける上で重要だった。僕は踏切り板を蹴ったのだ。

天草の土地

天草の中井家は、かつては村一番の地主であった。中井さんの祖父は、戦時中、代議

士もつとめている。

この天草の家、田畑、山林を中井さんは受け継ぐ。

山林は各所に分散しているようだが、それらを合わせると、一五〇ヘクタールにもおよぶ。

「人間が土地を所有するなどということは、いかにもおこがましく、愚かしい。そう考えている私が結局は天草の資産を相続するという皮肉なハメに陥った。兄や弟は天草に来たがらなかったのだ」

天草定住の初期、およそ三年ほどをかけて、中井さんは修行と学習のための全国行脚の旅に出る。

その旅の期間は、一年のうちの三分の一から二分の一におよんでいる。

学生時代の旅とは異なり、将来の農業生活に備えてしかるべき個人や団体をたずね歩く旅であった。

「我が帰農の記」には、こんな一文がある。

四国で自然農法の福岡正信さんを訪ねた折、朝方、山の小屋まで登ってきた福岡さんに自己紹介をしました。

「有機農業の運動を……」最後まで口にしないうちに福岡さんの目がチロッと光って、

「何！　運動だって！　そういうのが世の中を悪くするんだ！」。私にはこれで充分でした。脳天から足下まで貫き通った一言です。

旅を終えて天草に戻ってきた時は満身創痍でした。

この三年におよぶ旅を経て、玄米菜食・自給自足自炊という中井さんの基本方針が確立され、極端なまでの「実験的生活」への挑戦が開始されるのである。

■中井俊作
〒八六三―二四　熊本県天草郡五和町大字井手二六四六

左から、三島昭男（緑の文明学会）、天野慶之（日本有機農業研究会）、中井俊作（熊本有機農業研究会）、橋本宙八(パス)、河野　信（石原莞爾平和思想研究会）の各氏。第1回緑健文化協議会にて。1994年9月23日。

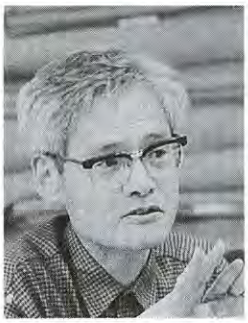
緑健文化協議会

今回は、槌田劭（京都精華大学教授）、藤本敏夫（自然王国代表）両氏のメッセージと略歴を掲載する。

槌田劭さんのメッセージは本紙あてにいただいたもの、藤本敏夫さんの文章は、『希望宣言』からネットワークに関する記述を抜粋させていただいた。

略歴はいずれも、それぞれの著書からお借りしたものである。

槌田　劭
（つちだ・たかし）



工業文明からの脱却

工業文明はその本質において、永続性・安定性を欠いている。再生循環することのない地下埋蔵資源に依存しているからである。

科学技術の進歩がもたらす物的繁栄は資源的限界に逢着するだけでなく、その生産・流通・消費の過程で排出する廃物廃熱によって環境問題をもたらす。

人類活動の巨大化は大きな地球を有限のものと認識せざるをえないところにまで至った。繁栄が没落の兆しであることを知るべきときに来ている。人類の歴史の長さに比べて、瞬時の一瞬に爆発的繁栄をたのしみ、そのあとに廃墟を残し、悲劇をもたらす所業は、利己主義であり、刹那主義の犯罪である。

工業文明の本質は犯罪なのであり、その犯罪性からの脱却は二十一世紀の課題である。物的繁栄の中で人びとは生きる力を失っている。文明につつまれて、天与の生きる力を曇らせている。ガン死、